

2026 年度大学院入試

前期日程（一般入試）

出題の意図

医療のテクノロジーの進歩は人々の健康に多大な貢献をしてきたとはまぎれもない事実である。しかし絶対的に正しいと考えられる事実の中にも同時に倫理的な課題が存在する。物事には必ずパラドックス的側面があることに関心を向け、多面的に物事を捉える思考力と看護専門職者として何をベースに看護職というものに向き合っていくのか 看護専門職者としての倫理性や職業観を問うことがその出題の意図である。

解答例

医療テクノロジーの進化により、診断や治療の精度は飛躍的に高まり、多くの命が救われている。一方で、柳田邦夫氏の指摘は、技術への過度な依存が「人の目」「人の手」「人の心」を介した医療の本質を見失わせる危うさを示しているといえる。

看護師は、常に「人を見る」ことを基本に据えるべきであると思う。バイタルサインやモニターの数値は重要な情報だが、それだけでは患者の全体像は見えてこない。表情や声の力、視線の動き、呼吸のリズム、手のぬくもりの変化など、機械だけでは捉えきれない「生きた情報」を感じ取る力こそが、看護の本質である。日々発展していくテクノロジーを有効に活用しながらも、「人間を見る力」を意識的に鍛える姿勢が今後ますます求められる。

また、超高齢社会において終末期医療の在り方について深く考えていく必要がある。最期の時を迎える患者が、機械音に囲まれた中で孤独に置かれる現実には、深い痛みを感じる。家族がモニターにばかり目を奪われないよう、患者の存在に目を向けてもらう その橋渡しをするのも看護師の大切な役割である。患者が「人として見送られる」時間をつくることは、本人や家族に対する看護の重要な責務であると考えます。

私たちは、医療テクノロジーの進化第一主義に陥ることなく、常に「人間中心」の視点をもって対峙していくべきである。看護とは、命を「見る」ことに始まり、「人を感じる」ことに終わる営みである。その本質を見失わず、看護を実践する姿勢こそが、看護師に求められるものであると私は考える。